

ねん がつ にち  
2023年9月17日

ねんかんだい しゅじつ  
年間第24主日

きくち いさおだい しきょう  
菊地 功大司教 メッセージ

たぶん みがつて じぶん あやま むじょうけん ゆる ねが じぶん  
多分に身勝手なわたしたちは、自分の過ちは無条件で許してほしいと願うのに、自分  
たい たしや あやま かんたん ゆる きも  
に対する他者の過ちには、そう簡単に許してしまうという気持ちにはなりません。い  
つくしみとゆるしは、わたしたちにとって生涯の課題であるともいえるでしょう。

ほんじつ だいいちろうどく しょ ふくいん わかい しる  
本日の第一朗読であるシラ書も、そしてマタイ福音も、ゆるしと和解について記してい  
ます。

わたしたちがたしや かんけい なか い かぎ りかい そうい しょう  
わたしたちが他者との関係の中で生きている限り、どうしてもそこには理解の相違が生  
じ、互いを理解することが出来ないがために裁いてしまい、その裁きは時として怒りを生  
み、結局のところ相互の対立を導き出してしまうます。シラ書は、人間関係における  
けつきよく そうご たいりつ みちび だ しょ じんげんかんけい  
無理解によって発生する怒りや対立は、自分と神との関係にも深く影響するのだと指摘  
むりかい ほっせい いか たいりつ じぶん かみ かんけい ふか えいきょう してき  
します。他者に対して裁きと怒りの感情を抱いたままでは、自分と神との関係の中で、  
ゆるしをいただくことは出来ない。

わたしたちはかんぜんなものではありませんから、しばしばつみ おか かみ もと みち ふ はず  
わたしたちは完全なものではありませんから、しばしば罪を犯し、神の求める道を踏み外  
したり、かみ せ む じんせい なか なんと あやま く かみ  
神に背を向けてしまったりします。人生の中で何度そういった過ちを悔い、神  
にゆるしをねがうことでしょう。しかしかみ かみ こ まえ たしや じぶん かんけい  
にゆるしを願うことでしょう。しかし神は、神にゆるしを請う前に、他者と自分の関係  
をただ かと もと たしや じんげんかんけい わかい じつげん  
を正しくすることを求めます。他者との人間関係において、ゆるしと和解が実現しなけ  
れば、かみ かみ もと で き しょ してき  
れば、どうして神にゆるしを求めることが出来るだろうかと、シラ書は指摘します。

ふくいん ななかい なな ななじゅうばい い ことば しる  
マタイ福音は、「七回どころか七の七十倍までもゆるしなさい」と言うイエスの言葉を記  
しています。もちろん 490 かい かい はなし なな ななじゅうばい ことば  
してきます。もちろん 490 回ゆるせばよいという話ではなく、七の七十倍という言葉  
で、かぎ ふか も かみ しめ  
で、限らない深さを持った神のゆるしを示します。またそのゆるしをいただいたものが、  
そのあわれみをたしや かんけい みずか こうどう はんたい りんじん  
そのあわれみを他者との関係における自らの行動につなげるのではなく、反対に隣人を  
むじひ しば はなし たしや しば かみ  
無慈悲に裁いた話をイエスはたとえとしてあげ、他者を裁くものには、神のゆるしがな  
いことめいじ  
いことも明示されています。

わたしたちは、なぜ、ゆるし<sup>つづ</sup>続けなくてはならないのか。それをパウロはローマの<sup>きょうかい</sup>教会  
への<sup>てがみ</sup>手紙で、「わたしたちは、生きる<sup>い</sup>とすれば主のために生き、死ぬ<sup>し</sup>とすれば主のために死  
ぬ<sup>し</sup>のです」と<sup>しる</sup>記すことで、わたしたちの<sup>じんせい</sup>人生そのものが、主<sup>しゅ</sup>ご自身<sup>じしん</sup>が<sup>い</sup>生きられたとおりに  
生きる<sup>い</sup>ことを<sup>もくてき</sup>目的<sup>してき</sup>としているのだと<sup>してき</sup>指摘<sup>してき</sup>します。

その主<sup>しゅ</sup>の<sup>じんせい</sup>人生とは、<sup>じゅうじ</sup>十字架<sup>かじょう</sup>上<sup>くる</sup>の<sup>なか</sup>苦し<sup>み</sup>みの中<sup>なか</sup>で、<sup>みづか</sup>自<sup>い</sup>らの<sup>いのち</sup>命<sup>うば</sup>を<sup>うば</sup>奪<sup>う</sup>おうとして<sup>い</sup>いるものを  
ゆるす<sup>あ</sup>いつくしみ<sup>あ</sup>であり、<sup>あ</sup>愛<sup>あ</sup>する<sup>あ</sup>すべての<sup>すく</sup>いの<sup>みづか</sup>ちの<sup>ぎ</sup>救<sup>せい</sup>いの<sup>あ</sup>ために、<sup>あ</sup>自<sup>あ</sup>らを<sup>あ</sup>犠<sup>あ</sup>牲<sup>あ</sup>にする<sup>あ</sup>愛<sup>あ</sup>  
と<sup>あ</sup>いつくしみ<sup>あ</sup>その<sup>あ</sup>もの<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>人生<sup>あ</sup>です。ですからわたしたちは、<sup>あ</sup>あわれ<sup>あ</sup>み・<sup>あ</sup>いつく<sup>あ</sup>しみ<sup>あ</sup>その  
もの<sup>あ</sup>である<sup>あ</sup>神<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>倣<sup>あ</sup>って<sup>あ</sup>生き、<sup>あ</sup>他<sup>あ</sup>者<sup>あ</sup>との<sup>あ</sup>関<sup>あ</sup>係<sup>あ</sup>の中<sup>あ</sup>で、<sup>あ</sup>徹<sup>あ</sup>底<sup>あ</sup>的<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>ゆる<sup>あ</sup>し、<sup>あ</sup>常<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>互<sup>あ</sup>い<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>受<sup>あ</sup>け入<sup>あ</sup>  
れ<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>道<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>歩<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>なく<sup>あ</sup>て<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>なり<sup>あ</sup>ませ<sup>あ</sup>ん。それは、わたしたちが、<sup>あ</sup>愛<sup>あ</sup>と<sup>あ</sup>いつく<sup>あ</sup>しみ<sup>あ</sup>その<sup>あ</sup>もの  
である<sup>あ</sup>主<sup>あ</sup>イエス<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>従<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>のだと、この<sup>あ</sup>人生<sup>あ</sup>の中<sup>あ</sup>で<sup>あ</sup>決<sup>あ</sup>めた<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>だ<sup>あ</sup>か<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>こそ、<sup>あ</sup>そ<sup>あ</sup>う<sup>あ</sup>せ<sup>あ</sup>ぎ<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>得<sup>あ</sup>  
ない<sup>あ</sup>ので<sup>あ</sup>あり<sup>あ</sup>ます。

「<sup>い</sup>生きる<sup>い</sup>と<sup>い</sup>すれば<sup>い</sup>主<sup>い</sup>のため<sup>い</sup>に<sup>い</sup>生き、<sup>い</sup>死ぬ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>すれば<sup>い</sup>主<sup>い</sup>のため<sup>い</sup>に<sup>い</sup>死ぬ<sup>い</sup>のです」という<sup>い</sup>パウロ  
の<sup>ことば</sup>言葉<sup>いまいち</sup>に、<sup>い</sup>今<sup>い</sup>一<sup>い</sup>度<sup>い</sup>心<sup>い</sup>を<sup>い</sup>向<sup>い</sup>け<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>し<sup>い</sup>ょう。